

运城の旅

後藤千恵

ご存知の方も多いと思いますが、2月10日は中国において“春節”という新年を迎える大切な行事で、ほとんどの人が故郷に帰り、家族や親戚と過ごします。その期間、学校はもちろんのこと、飲食店をはじめとする商店なども休みとなります。

私はこの休みを利用し、山西省の最も南に位置する运城市（ユンチャン市：運城市）に、同じ埼玉県の親善大使である加藤佳奈子さんと共に旅行に行ってきました。

运城市は、私たちが学んでいる太原市から約400km離れており、埼玉県から大阪府ほどの距離があります。私たちは大巴（ダーバー：日本での長距離バスにあたります。）に乗り、5時間程で运城に到着しました。

また、运城市は山西省内でも歴史のある地区の一つで、「三国志」の登場人物である“関羽”の出身地として知られています。それに関連して、运城市の关帝庙（グアンディーミャオ：関帝廟。関羽を祀った廟のこと。現在、関羽は全国各地に作られた関帝廟や商店などで、商売の神様として祀られています。）は関羽の出身地にあることのほか、全国で最も大きい关帝庙として全国的にも有名だそうです。そこで、私たちはまずこの关帝庙へ行ってみることにしました。

关帝庙は市の中心からバスで1時間ほどの距離にあります。到着してみると、まず、その噂にたがわぬ大きさに驚きました。その上、門から直線状に本殿までいくつもの門や建物、庭があり、まるで故宮のようなつくりと迫力でした。どの建物も見ごたえがあり、訪れることができよかったです。

その後、李家大院（リージャーダーユエン）という、清代に建てられた商人一族の家に行きました。その一族は「李」という、商売に成功した一族で、明代から清代にかけて栄えた“山西商人”の中でも3本の指に入るほどの財を築きあげました。それぞれの住居だけでなく、公園や舞台、仕事場を備えたこの李家大院は「家」というには大きすぎるもので、もはや一つの「村」や「町」と言った方がいいほどです。ここはこの李家一族を主題としたドラマの舞台にも使われたこともあり、観光客も多く訪れていました。清代の建造

物はほとんど残っていませんが、当時の建築物や商人の生活、また一族が時代と共に歩んできた歴史などを知ることができました。

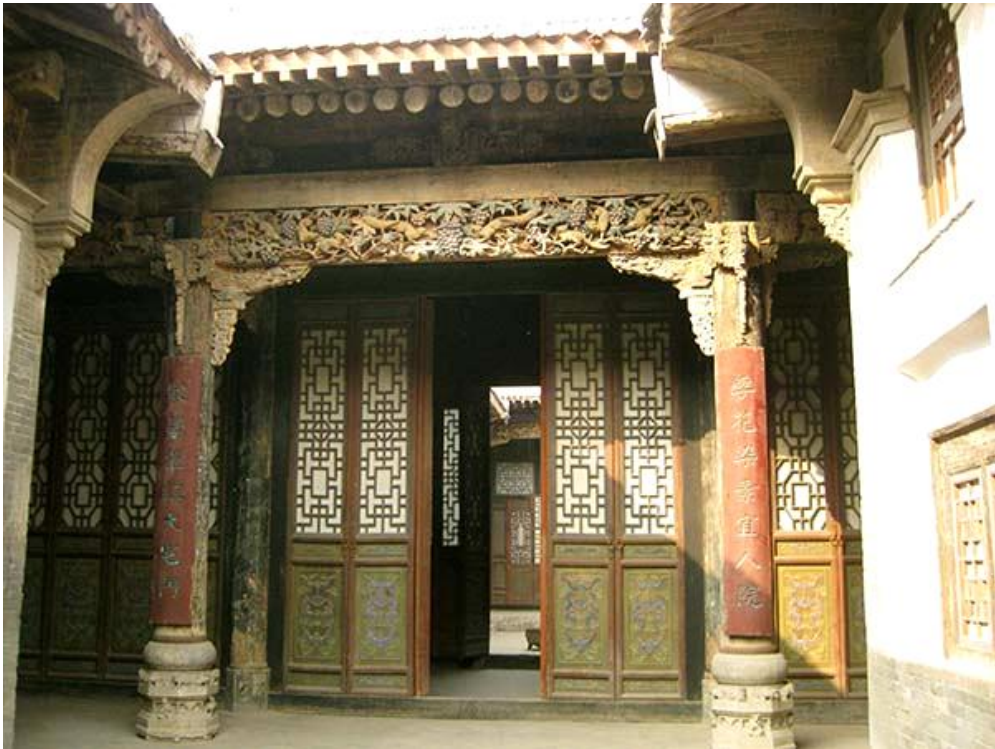
最後に私たちが訪れたのは、関羽や山西商人にも関係の深い、盐湖（イエンプー：塩分濃度の高い湖を指します。）という湖です。ここでは塩が取れるため、関羽がここで塩の密売をしていたということが伝えられています。また、明代初頭に政府相手の塩の販売をしていた商人たちがそれによって築いた財産や組織を元に、清代末にかけて様々な方面の商売に成功し、“山西商人”と呼ばれ一目置かれる存在に成長したということもあり、“始まりの場所”としての盐湖はとても感慨深いものでした。

さらに、盐湖の近くに建てられている池神庙にも立ち寄りました。その起源は古く、唐代に創建されてから現在まで、修復、増改築を繰り返して今に至るそうです。中に入って分かったのですが、この池神庙は盐湖が一望できる場所に建てられており、内陸の貴重な塩の産地として遥か昔から大切に利用されてきたことや、盐湖の安泰を祈る気持ちが伝わってきました。

今回の旅行では、山西省内の歴史ある都市の一つである运城市で山西省の歴史の一端を実際に見て感じる事ができ、とても楽しかったですし、有意義であったと思います。また機会を作って山西省内の別の場所にも行ってみたいと思います。



この門の奥に关帝庙があります。ここにたどり着くまでにも様々な門や建物がありました。



李家大院内です。このような見事な彫刻や装飾も見る事ができました。



池神庙から見た盐湖です。左の建物が廟で、かすんでいて見にくいです。奥には盐湖が広がっています。